

伊勢の水銀剤

中村直勝

一

大和吉野川の上流は三つに岐れるが、その三川ともに、沿岸に、丹生川上社が奉祠されておる。丹生川上上ノ社、丹生川上中ノ社、丹生川上ドノ社と言われ、三社を合して、もと官幣大社。広瀬龍田にある風神と併し、平安時代以来の名社中の名社であった。丹生川上社は「雨師社」とも言われ、降雨止雨を掌ることが、その神徳であるとされた。

農を以って国政の基としたわが国では、五雨十風のあることを以て、理想の天恵とした。従って歴代に亘り、宮中年中行事の中で、雨神風神への奉奠は特に重大なる祭事であった。降雨を祈る時は黒馬を、止雨の時は白馬を索いて、吉野の川上まで、勅使を差遣されることが、本義であった。後世の絵馬の起源である。

丹生川上の神は雨師明神とも言われて、その故を以って、国家から特殊の崇敬があったことには、不思議はないし、それに対して不平を言う気はないが、止雨降雨という福徳が余りに誇張されすぎて、丹生明神の本質たる重大なることが、かき消されておったような気がするので、それに関する従来の神祇史研究に、一矢を酬いたのである。

それは、その神名たる「丹生」とは何ぞ、という疑問からである。

丹生とは、代赭色の土ということではないか。

二

丹生の名は、早くも神武天皇東征の時に見える。

伊勢の水銀剤

神武東征の信否はともかくとして、その古伝に一応の耳を傾けると、次のようである。

熊野灘を迂回、那智勝浦の辺で上陸された神武天皇は、八咫鳥に導かれて熊野大峰吉野の山々を越え、大和国の東端、吉野川の川尻である丹生川に到着された。その途中で、井光、石押分、土蜘蛛と言われる山賊に遇われた。

そこで、何とかして刃の力を用いないで、天下自ら平和ならんことを、天地神明に祈られた。その事が果せるかどうかの神意をとうべく、水を用いずして飴を作ろう事を仰せ、水を用いずして飴を作る奇蹟を示され、ついで丹生の川に壺を投込まれると、河の鮎が自ら水面に浮び上った。これで、神意のほどが示された。間もなく大和平定の偉業を完成されるのである。

三

この物語は、神話であるから、これから歴史事実を掴まんとすることは、大人気ない企であろうかも知れないが、思い切って、この物語を勘考して見ると、次の三点に、何やらん歴史の影のようなものが、掴めそうである。

第一。石押分（いわおしわけ）井光（いひかり）土蜘蛛という名は、何れも鉾山の坑道に出入している鉾夫の事ではなからうか。土蜘蛛というのは、坑道内の危険に備えて、腰にザイルをつけておる姿を形容したものでないか。

第二。水を用いずして飴を作るということを、いまのわれわれが嘗めておるあの甘味の「飴」と見ることはどうであろう。三千年前の古代に、飴のような甘味があり得るであろうか。

寧ろこの飴の字は誤字であって、もともとは鉛の字ではなからうか。柔かい鉛、つまり水銀を採取されたのではないか。丹生というのは辰砂を含んでおる土であって、そこから朱も採れるし、水銀も採れるのである。水銀は朱泥土の中にどうかすると、一摘の塊った液様として、露出しておることがある。

第三。丹生川の鮎が浮び上ったということは、その壺の中に、朱かまたは鉛化剤かの毒薬を入れて、川中に投入されたので、その毒にあてられて、川魚が死んだのではないか。

それらを併して考えると、神武天皇丹生の川上の物語は、丹生、即ち辰砂、朱、水銀という一連の毒物の存在と、その使用とを、暗示する物

語ではないか。

広く全国的に手取って見ると、丹生とか赤坂とか血原とかいう地名のあるところは、辰砂を含んだ土壌のある地点である。そうした辰砂を掘り出すべく坑道に出入するから、この人々は穴師であった。それが雨師と転訛して、丹生明神を雨神にしまったのである。

朱は顔料であることの外に、貴重なる防腐剤である。

四

中大兄皇子が中臣鎌足と志を合わせて蘇我氏討伐の密議をされた場所であるので、そこに談山（語らいやま）の地名が起った、という伝説があるが、これは「談山」という文字から附会された物語であろう。中大兄皇子とか中臣鎌足とか言った当時政界第一人者、しかも誰が考えても反蘇我氏の明星である二人の密議が、飛鳥京至近の多武峰で、行われるべき筈がない。蘇我氏が、そのような事を看過すべきわけはない。

談山の名は、その初めは丹山であつたろう。いまでも桜井市から談山神社へ登る道に、水銀鉍脈の露頭が三、四ヶ所見られる。俚人は談山をタンザンと呼んでおる。ダンザンとは決して言わない。

談山の鳴動ということが古來信仰せられておる。談山神社の奥宮地とも言うべき地盤が、時によると鳴動して、その時代の政界に大織冠鎌足公が戒告を与えられたのであると言われる。この鳴動というのと、鉍石を爆破する時の音響ではないか。

五

天武天皇及び持統天皇の吉野離京への行幸は、普通では考えられないほどの頻繁さである。丹生川上にある宮滝の景観が御意に叶うたのであつたと解釈されてあるが、果してそうであろうか。

それならば萬葉人にとりては、寔に慶賀すべきことであろうが、宮滝の景観にそれだけの魅力はない。地方の離宮に巡幸することが、その当時の中国帝王の衿持であつたので、それに学ばれた一耘の帝王学であつたのかも知れないが、それにしても、吉野離宮行幸の度数が多きにすぎ

る。

丹生川上の辰砂、朱の入手。それを解く謎ではないだろうか。

六

弘法大師が高野山に金剛峰寺を創建された時に、狩場明神と丹生都比売大神の助勢によりて功を全うされた。爾来、この両神は寺内鎮守弘法擁護の神として、鄭重に奉斎されてある。

丹生都比売大神は決して雨神として祭られたのではない。高野山の山麓東西に丹生が相当に存在する。丹生都比売大神というのは、その丹生の採掘権を大師に譲与されたのではないか。狩場明神というのは、その辺の狩人で、あの山中に広き平地のあることを、教えたのではないだろうか。

七

六一山室生寺は、弘法大師が創立者ではないらしいが、その傘下に加わってから、寺運は隆んじた。

その附近に辰砂や水銀を発掘した坑道が残っておる。いまも本堂に登る石段には、何となく紫色を帯びたものがあることに気着くであろう。寺から五六丁の上流に龍穴神社がある。御本殿にある龍穴なるものは、水銀鉱採掘の坑道であろう。

その附近に血原という地名がある。土壌が血色である。数百年前、ここで仇討があつて、その時に流れた血潮で土が染まったのであると、伝する。血潮が数百年も代赭色のまま残るべきわけはない。即ち辰砂を含んだ丹生の土色である。

八

太平洋戦争の時であった。楠公遺蹟の千早赤坂の地名から推して——千早は血原の転訛と見たので——必ず水銀が採れるであろうことを提唱して、大阪の日本合成化学工業株式会社に水銀採掘を慫慂したことがあつた。たしかに水銀は採れて、一応、軍部の御用を満たしたことがあつた。

それが余りに微量しか採れなく、今日では採算に合わぬので廢坑になったが、赤坂千早から水銀や朱が採れることは確かである。これが大小両桶公活躍の軍資金であったと見たら、どうであろうか。

九

とりとめのないようなことを、長々と述べ、それに憶説を加えて、尤もらしいことを書いて見たのは、こうした予備知識を以って、三重県多気郡勢和村大字丹生にある丹生大師のことを記そうとするからである。

松坂市から南西方三里許りにある。丹生明神神宮寺成就院と公称する。

一〇

『統日本紀』和銅六年（七一三）五月十一日の條に、諸国から貢納する調は、布を以てすることが本来であるが、次の国々は、代物を以てすることにした、という規定がある。

相模、常陸、上野、下野、武蔵の五国は絁布を、大和、參河は雲母を、近江は慈石を、信濃からは石硫黄を、と十数ヶ国の特産物を指定せる中に、伊勢は水銀を以てする事が記されておる。これが伊勢水銀の文献上初見である。

『延喜式』の内蔵寮のところには、伊勢水銀小四百斤の貢進あることを記しておる。早くも伊勢水銀は皇室の御用品であった。

『延喜式』に、もう一ヶ所、「民部下」のところに、諸国からの正税として政府に納むべきものは米穀であるが、諸国の都合によって、大絹、白絹、鹿革、紫草以下を以てする事を認めたことがある。その中に、伊勢は水銀四百斤を以てすることがある。

伊勢は、調も租も、共に水銀を以てしたのであり、伊勢水銀は天下の名物であったに相違ない。

一一

『今昔物語』卷第十七に「伊勢国人、依地蔵助存命語第十三」として、伊勢国飯高郡のある下人が、郡司の命によりて、公に進むべき水銀を

伊勢の水銀剂

採掘すべく穴に入つて、水銀を掘つておつたところ、穴の入口が落盤して、坑内に閉じ込められたが、日頃から信心を致しておる地藏菩薩の御導きによつて、無事に坑外に出ることが出来たという奇特談がある。

同書卷第二十九に「於鈴香山、蜂螫殺盗人語第三十六」がある。

京の水銀商が、年来、伊勢に来て絹、布、糸、綿、米を商い、水銀を購入して帰つておつたが、ある時、八十余人の盜賊に襲われ、すべての荷物を奪われ、半死半生の目に遇つた。ところへ、虚空から長さ二丈ばかりの赤い雲が現われた。それは一群の蜂であつた。盗人一人毎に二百の蜂が着いて、その悉くを螫し殺して、飛び去つた。

この水銀商は、京の家で酒を造つておるが、常にそれを蜂にも吞ませておつたので、いまその蜂が恩返しをしたのである、と。何れも京の水銀商が伊勢水銀を入手する物語であるが、この物語からでも、水銀が如何に貴重品であつたかが、察しられよう。

ここで思い出すことは『日本書紀』欽明天皇即位前紀のところにある山城国深草住人秦大津父のことである。

大津父は伊勢に行商するを常とし、ために大いに致富、天皇踐祚式典の後援者となつたらしく、その後、大蔵省に奉仕したのであつた。

彼が秦氏であつたからには、絹織物を持って伊勢にまで出かけたのであろうことは、察せられるが、何の故に、わざわざ伊勢にまで出かけたか。伊勢には絹織物を購入するほどの富者がおつたからであらうか。それとも伊勢水銀と交換したのではなかつたか。

ここにも伊勢水銀の俤が見られる。

一一一

伊勢水銀の歴史を物語る文献は、この後、しばらく、事を欠く。やつと現われるのは南北朝時代になつてからである。

元弘三年（一一三三）五月廿四日附で録上された「元弘三年内蔵寮領等目録」に

一 伊勢国丹生山、地頭押領之、用途四五貫文進濟云々

とあるものが、それである。ここでは水銀の代りに金子で貢納しておつたらしい事しか、伺えない。

ところが、荻野三七彦氏所蔵著文書に、次の一通あることを知つた。

雑誌『日本歴史』第一百五十五号（昭和三十六年五月刊）に「伊勢丹生水銀の文書」という論文に引用しておられる。

（端裏書）

「綸旨案 丹生山水銀事 延文三十四」

綸旨正文被下氏女了

当寮領伊勢国丹生山水銀惣奉行事氏女申、商人等新儀非法事 奏聞之処、事实者、太不可然、嚴密加下知、可令全寮役給之由、被仰下候也、

仍執達如件

延文三年

二月十四日 左中弁時光

謹上内蔵頭殿

さきに言った元弘三年の目録は五月廿四日の録上であった。その五月十七日には、在京都の光厳天皇は、隠岐から還幸中の後醍醐天皇から廢位すべく勅命があった。その年号たる正慶二年も中止になり、元弘三年に復した時である。伊勢丹生水銀も、後醍醐天皇の隠岐御遠幸中に、鎌倉方の地頭が押領したのであったろう。

その後、建武中興と共に伊勢丹生山も再び内蔵寮に復して、実績を挙げておったのであったが、とかく水銀の購入について、商人が非法押妨を常に加え、惣奉行職であった藤原氏女を悩ましたので、延文三年（一三五八）のこの後光厳天皇綸旨となったのである。

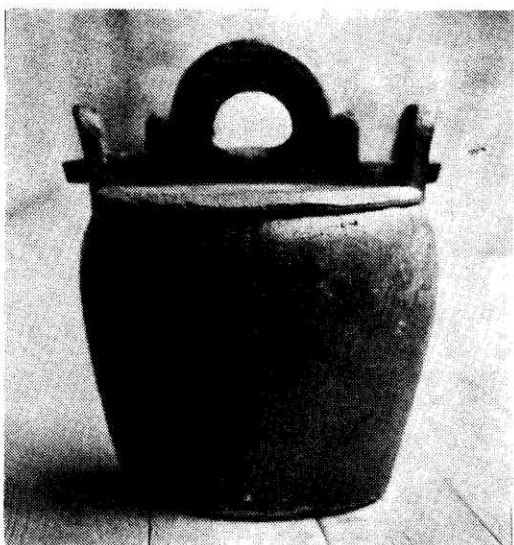
宛名の内蔵頭は山科教言の事で、応永十六年（一四〇九）十二月十五日正二位権中納言で薨じた人である。

ここで注目しておいてほしいことは、伊勢丹生水銀が、内蔵頭山科家の支配下にあったことである。

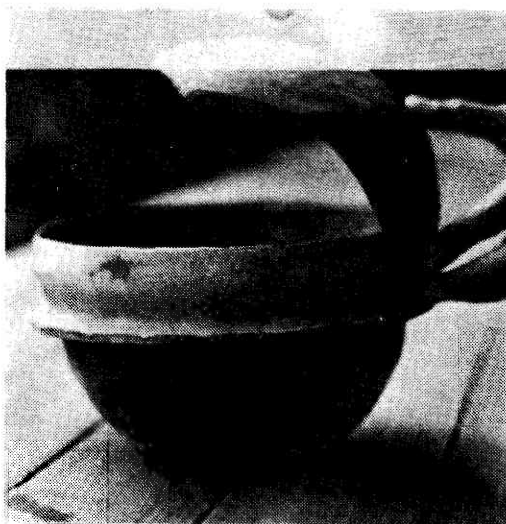
一三三

松阪市の南方、櫛田川の上流、高見山の麓に、弘法大師を本尊とした丹生大師堂がある。そこに辰砂を坑内から搬び出した木桶や、辰砂を蒸

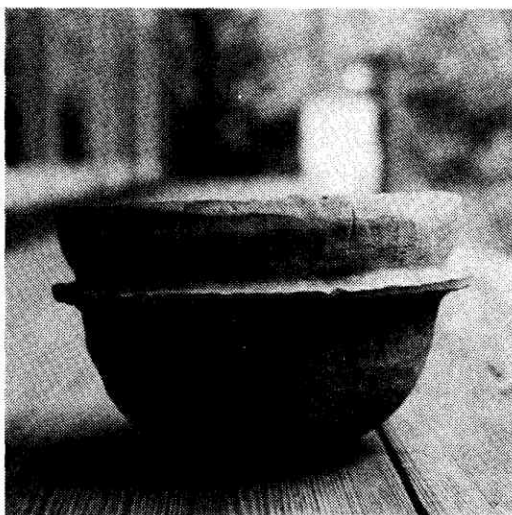
伊勢の水銀剤



辰砂を持ち出す木桶



水銀升錬用釜と蓋（部分）



水銀升錬用素焼の釜

寺伝によると光仁天皇宝龜五年（七七四）弘法大師の師僧勤操大徳の開基という。弘仁四年（八一三）大師この地に巡錫し、この精舎あるを知り、師の遺業を全うすべく、梵刹を整えた。大師はついで高野山を開かれた、という。

一四

昭和五十年二月十日仏縁あって、参山した。

成就院には、坑道で採集した辰砂、それを持ち出す木桶、水銀升錬用の素焼釜、その蓋（破片）が現存する。この陶器の釜や蓋には、焼けた水銀槽が附着してある。

この土地に、四五年前までは、水銀を採集しておった会社があったが、鉍害がやかましくなつたので業務を中止してあるそうであるが、ここの鉍脈は含有量が豊富なので、残り惜し

溜して水銀を造った土製鍋があるときいて、十年来、参詣の日あるべきを祈願しておった。

江戸時代の松坂白粉は有名なもので、三井家は、それを松坂から江戸に運んだものであった。松阪市にいまも三井屋敷がある。

その白粉の鉛毒で、歌舞伎役者は五体不随になつて仆れたのであった。

その丹生大師は女人高野と俗称する。丹生山成就院が公称である。境内を接して祭つてある丹生神社は神宮寺であった。

いのである。ということであった。

丹生神社の神苑にある杉の大木にも驚いた。伊勢神宮の古杉老樹にも劣らぬ巨姿である。

一五

以上に縷々絮々と書いたことは、既に二三の先覚が言及されたことであって、今更らしくここに書く必要のないことであるかも知れないが、最近になって、伊勢水銀については、その地方の人々からも忘れられておった別箇の用途があったらしい事に、氣附いたので、この一文を草して御叱正を仰ぎたいと念じたから、今日まで知られておった伊勢水銀のことを、以上において、一応瞥見しておいたのである。

次に述べるであろう知見を得たことは、丹生大師の大師堂に参詣したおかげで得た示唆である。それにしても、そうした史蹟には、自ら足を運んで、その実地見学ということが、如何に必要であるかを、しみじみと感じたからである。

一六

成就院の本堂たる大師堂に賽した。堂宇は立派とは言い得ない。つつましやかな小堂であった。その紙張り格子戸の格子に、無数のへヤービ
ンが挿してあった。数万にも及ぼうか。切髪の幾束も懸けてあった。

女性悲願のしるしであろうか。余りにも多数のピンが気になる。この辺の婦女子が良縁あらんことを祈願して、その篤志のほどを示そうと、切髪を供えたのであろうか。それはどこにでも見られる通例である。その切髪の代りに櫛を以ってすることもある。その櫛を簡略してヘヤービンを以てしたことでもかも知れぬと思い、この地方女性のやさしさに心を打たれながら、寺を辞した。お寺におった時に、次の考えが浮んでくれば、寺の住持について、その事をきくのであったが、松阪市に帰ってから気が附いたので、六日の菖蒲、十日の菊の思いである。

その後、成就院に数回手紙を出して見たが、いまなお返事が貰えない。何か訳があるのかも知れない。

ふと心に浮んだのは、あのピンは縁結びの祈願ではなくして、墮胎の秘願ではなからうか、ということである。丹生大師に参れば、その御利益があったのではなからうか。

伊勢の水銀剤

いくら伊勢松阪の婦女子が無垢であろうとも、今日此頃、縁結びを神仏に祈るような古風な人もなからうし、仮りに在るにしても、それは二、三か四五人のことで、かくも多数に、この奥山まで、参詣するということは、在り得まい。いまの女性は、もう少し甲斐性があるう。

松阪からここまで三里。山辺の里まで、わざわざ足を運ぶのは、秘かなる悲願からではあるまいか。

水銀剤が墮胎剤になるのではないか。

一七

『山科言経日記』天正十年九月七日に

興正院官女小少将方ヨリ、小川善大夫へ書状ニ、懐妊三ヶ月也、然者、ヲロシ薬之事、申由有之、種々斟酌ナカラ、七包遣了
という記事がある。言経は言経の子で、さきに出た教言から七代の後胤である。この時、内蔵頭であった。

山科家の侍官小川善大夫に宛てて、興正院から手紙が来た。興正院（多分、尼門跡の寺院）の女中小少将が懐妊した。三ヶ月目である。墮胎するなら今である。御手許にオロシ薬が在ると承るので、ほしいと言って来た。

言経は、それは内秘の薬であるから、出すべきか、否むべきか、いろいろと考慮したが、渡さざるを得まいと観念して、七包を交附した、と
言うことである。

墮胎薬のあることは、表向きにすべきでない。それを山科家から出しておることは、秘中の秘であろうが、小少将は尼門跡の女中であるとするれば、どうしてもその不行儀を隠してやらねばなるまいから、言経は躊躇しながら、渋々、出したのであろう。この文中に言経の心は覗ける。

内蔵寮領伊勢水銀。内蔵頭山科言経。墮胎剤。この三点が繋がらぬものか。

一八

これを知ったので急いで成就院に手紙を出して、江戸時代に寺家から、何かの和薬か粉薬かを信者に渡していなかったか。妊婦を預ってやっ

た、というような事が無かったか。問い合したが、返事が来ない。近く出かけて聞いて見るより仕方があるまい。

一九

併し、江戸時代の西村和廉氏の著である『丹洞夜話』（神宮文庫本）には、「水銀、令人筋骨拘攣、解金銀銅錫毒、墮胎絶孕」とあるそうで、水銀が墮胎剤であることは、ここにたしかに認められておる。この書名『丹洞夜話』から、この一冊は水銀のことをかいた本か、と思うので、これも成るべく近い機会に、神宮文庫で披見させてもらおう心積りである。

貝原益軒の『大和本草』には、軽粉のところで、これは「賦粉とも水銀粉とも云、功能多し、水銀にて製する所なり、本邦にては、平安城及伊勢にて之を造る、毒あり、楊梅瘡に、俗医多く、之用ゆ、之を服すること久しければ、治し難し、慎みて妄に用ゆる勿れ」と言っておるところがある。これを見ても、伊勢水銀剤が驅梅葉であったことは、確かであった。驅梅剤が墮胎薬には成るまいが、効くと信じて、用いたかも知れない。

二〇

丹生が辰砂であり、それから、朱なり、水銀なり、が製造されて、鍍金剤として防腐剤として、朱塗りの塗料として、の用途ありしことは、近来、大いに認められて来たが、丹生から墮胎剤が造られたことに言及した人はなかった。

それに気が着いたのであるから、もっと研究して見たいが、それ以上に丹生の薬剤的研究に深入りすることは、私の任でないから、これ以上に及ぶことは遠慮しよう。

少し調子に乗りすぎたが、思い切って、次の暴言を吐いておきたい。

女人禁制を厳しく言っておる高野山の末寺に、女人の入山を許すお寺がある。女人高野と言われる。大和の室生寺はその代表的な名刹である。松阪市の成就院もまた、女人高野の称がある。女人の入山を認める以上に歓迎したらしい。

何れも水銀採掘の寺である。

伊勢の水銀剤

伊勢の水銀剤

弘法大師の真言密教の裏面に、女性墮胎を認めたか、どうか。

墮胎ということが、今日ほど悪事とは思われなかった古代や中世において、必ずしも、その事は、墮地獄の悪罪であったかどうか。日本人口とその調節、という大局から眺めて、水銀剤もまた、救済の妙薬ではなかったか。

女人高野から、そのような秘薬が施与されたということが、掴めないものであろうか。

寧ろ、その秘境の奥底にこそは、宗教の慈悲がひそむのではないか。